國學院大學学術情報リポジトリ

The Rubbed Copies of Carvings and Metalworks in Nikko-Toshogu Buildings owned by Kokugakuin University : their architectural significance

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2023-02-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山田, 岳晴 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00002019

國學院大學蔵「日光東照宮彫刻・金物類拓本一括」について
―日光東照宮社殿彫刻および金物拓本の建築学的意義―

山田岳晴

要旨

國學院大學は、現在、日光東照宮などの社殿彫刻・金物の拓本を複数有している。その数は五十九部にのぼる。それらは、明治時代に東京帝国大学教授であった塚本靖が所蔵していたものである。意匠・工芸の専門家であった塚本靖による建築意匠学の観点からの日光東照宮の論説が、明治時代に初めて、建築学会（現在の日本建築学会）に掲載されている。日光東照宮拓本はこうした塚本靖の研究活動に使われたものと考えられ、日本における建築学の草創期である明治時代の学界の様相を示す実地資料として評価できる。拓本資料は、社殿の金物が中心であり、建築意匠学において扱われたという当時の日光東照宮の評価を表しているものとも言える。また、日光東照宮拓本は、明治時代の日光東照宮の現状を写し取っているという点で貴重である。特に、明治時代においても、部材に風食があったことが読み取れるため、胡粉塗のない時期が想定される。その時期は考察により、寛永十三年（一六三六）に徳川家光により造替された初期しかなく、家光再建の日光東照宮は、当初は欅材の素木造であった可能性が指摘できる。塚本靖の拓本資料は、そうした日光東照宮の社殿の変遷を考える上でも重要な資料であると評価できる。

キーワード

東照宮、社殿、彫刻、金物、塚本靖、風食、胡粉塗

緒言

國學院大學は現在、資料名を「日光東照宮彫刻・金物類拓本一括」として、日光東照宮や大猷院霊廟の社殿彫刻・金物の拓本などを複数有している。それらは古書店を経て、昭和五十七年（一九八二）に神社関連資料を収集していた國學院大學神道資料館に所蔵されたものであったが、それ以外は来歴がなく、國學院大學の研究機関の改組などにより、以上の経緯までも不明となっていた。

本稿では、國學院大學に所蔵されているそれらのうち、日光東照宮の社殿彫刻および金物の拓本（以下、日光東照宮拓本という）に関して、その来歴の調査の結果を報告し、日光東照宮拓本の特徴や建築学的意義について考察を加えることにする。

なお、日光東照宮の正式名は東照宮であるが、東照宮を正式名とする神社が多数存在するため、区別のため地域名を冠して日光東照宮と記すことにする。

資料の状況と来歴

来歴が不明となっていたこの資料は、拓本が厚紙の台紙に貼られたもの五十九部と、建築のスケッチなどが綴じられた冊子二冊からなる。それらは縦五十五センチメートル、横三十七センチメートル程度に段ボール紙で包まれた状態で保管されていた。来歴の手がかりは、資料に押された「塚本氏図書記」の蔵書印、冊子にある「塚本氏建築粉本」との表題、および拓本の対象が日光東照宮や大猷院霊廟などであることであった。

塚本という名前と日光東照宮の関わりを調べた結果、明治時代に東京帝国大学の塚本靖が、東照宮について学会で発表していることが判明した（詳しくは後述）。また、当資料のなかに、一八七七年（明治十年）の記載があるジョサイア・コンドルの設計による工部大学校の平面図・立面図をもとにした課題が綴じられていたため、当資料は、東京帝国大学との関係が確認でき、塚本靖が当時、所蔵していた資料であったと考えられる。

これら資料を旧蔵していた塚本靖の略歴を記すと、明治二年（一八六九）京都生まれ、明治二十六年（一八九四）帝国大学造家学科を卒業、卒業後大学院で建築装飾法を研究、明治三十一年（一八九八）東京帝国大学工科大学講師、翌三十二年（一八九九）同助教授、明治三十五年（一九〇二）同教授、翌三十六年（一九〇三）工学博士を取得している。大正九年（一九二〇）および大正十五年から昭和四年（一九二六～二九）東京帝国大学工学部長を務める。昭和四年に退官、東京帝国大学名誉教授となる。昭和十二年（一九三七）逝去している（勲二等正三位）。

その間に、帝室技芸員撰択委員、古社寺保存会委員、明治神宮造営局評議員・参与、議院建築準備委員会臨時委員・臨時議院建築局常務顧問、宮内省内匠寮御用掛、特許局審査員・技師・審判官、営繕管財局顧問、日本万国博覧会々場計画委員会委員、帝国芸術院会員など、建築（特に意匠）・工芸に関する役職を務めた。

研究分野に関連したものを簡単に挙げると、明治三十二年から三十五年（一八九九～一九〇二）建築学研究のため英仏独三か国に留学、明治三十九から四十一年（一九〇六～〇八）貿易工芸品の意匠調査で清国に派遣、明治四十三年（一九一〇）日英博覧会の用務で英国へ出張、大正八年（一九一九）東京帝国大学工学部講堂ならびに教室および実験室新築工事設計を嘱託されている。また、大正十二から十三年（一九二二～二三）および昭和二年から三年（一九二七～二八）にかけて建築学会の会長も務めている。

日光東照宮拓本の調査の概要と拓本資料の内容

調査は、記載文字の確認および資料用の写真の撮影等を実施した。調査を行った台紙については、一連の番号1から29を付け、そのうち拓本別に補助番号を付けた（表1を参照）。

台紙の大きさは二種類ある。一つは縦三四・〇センチメートル、横五二・〇センチメートル、もう一つは縦五九・二センチメートル、横三八・〇センチメートルとなっている。台紙はほぼ前者であるが、台紙28と台紙29が後者である。それぞれの台紙には、拓本が数点貼られており、神社名、社殿名、部材名、部分名などが墨筆で書き込まれている。また一部の台紙には塚本自身により振られた通し番号がある。[1] その番号は、國學院の所蔵する拓本の台紙の枚数を超える通し番号となっているので、國學院の所蔵する東照宮の拓本資料は、塚本靖が所蔵していたと考えられる拓本資料のうちの一部であることが分かる。また、拓本紙には、鉛筆書きによるメモがあるものがある。文字が拓本紙から欠けているものもあり、[2] 調査ののちに拓本を切り取り、台紙に貼って整理したものであると考えられる。

日光東照宮拓本は、比較的細い幅で炭の濃淡があり、これらは炭の擦り痕と考えられる。したがって、通常の湿式拓本ではなく、薄美濃紙を対象に当て、その上から木炭で擦った乾式拓本と考えられる。

拓本の内容については、日光東照宮社殿の彫刻の拓本が十五点、金物の拓本が三十八点、その他の拓本（鋳抜門・燈籠）が二十七点である。[3] それらが対象としている社殿名、部材名などは、表1にまとめておく。

塚本靖の東照宮研究と明治期の建築学界

塚本靖の専門分野は、略歴で述べた通り建築意匠学である。その塚本靖と東照宮の関わりが分かる最初のものは、「日光廟建築装飾概論」（『建築雑誌』

表１　國學院大學蔵日光東照宮社殿の彫刻・金物拓本一覧表

台紙番号	補助番号	台紙名称（墨筆・社殿等）	拓本名称（墨筆・部材等）	寸法(cm) 縦	寸法(cm) 横	鉛筆書き	意匠等	拓本対象
1	1	東照宮陽明門	柱	27.2	25.8	陽明	鶴丸、地紋亀甲	彫刻
	2	東照宮陽明門	方立	24.8	8.2	陽明門方立	地紋松皮菱に花菱	彫刻
2	1	東照宮陽明門	柱	27.9	25.2	―	丸に獅子、地紋亀甲	彫刻
	2	東照宮陽明門	柱	27.6	25.5	陽明門	丸に竹林に虎	彫刻
3	1	東照宮拜殿之柱		24.8	28.0	仝柱、刻	地紋紗綾形	彫刻
	2	東照宮拜殿之柱		17.1	26.0	東拜柱か	出八双、四葉	金物
4	1	東照宮合之間	腰長押	20.7	37.5	―	地紋入子菱	彫刻
	2	東照宮合之間	火燈窓	20.2	11.0	―	立涌に花菱	彫刻
5	1	東照宮拜殿		8.0	38.6	―	出八双、唐草	金物
	2	東照宮拜殿		15.6	15.8	―	地紋麻の葉散	金物
	3	東照宮拜殿		5.7	7.0	―	金物端部	金物
	4	東照宮拜殿		5.9	7.1	―	金物端部(同上か)	金物
	5	東照宮拜殿		4.7	1.5	―	金物端部の部分	金物
6	1	東照宮拜殿	高欄	37.1	14.1	東、拜、高欄	出八双、六葉葵、紗綾形、唐草	金物
	2	東照宮拜殿	向拝ノ柱ノ角	20.1	8.1	―	地紋立涌	彫刻
	3	東照宮拜殿	長押	16.2	15.2	―	屈輪	彫刻
7	1	東照宮本殿高欄		12.3	20.1	東本殿高欄	笹金物、六葉葵、石畳	金物
	2	東照宮本殿高欄		14.6	26.0	―	笹金物、六葉葵、入子菱	金物
	3	東照宮本殿高欄		9.8	14.5	仝	隅金物、紗綾形	金物
	4	東照宮本殿高欄		9.8	14.8	―	隅金物、紗綾形(同上か)	金物
8	1	東照宮奥院拜殿	扉	36.4	28.1	東ノ奥ノ拜ノ扉	地紋麻の葉繋、屈輪唐草	金物
9	1	東照宮奥院鋳抜門		22.2	15.9	―	金欄巻、紗綾形、麻の葉、亀甲	その他
	2	東照宮奥院鋳抜門		21.0	18.2	―	金欄巻、紗綾形、亀甲、麻の葉	その他
	3	東照宮奥院鋳抜門		27.3	26.2	東鋳抜門	紗綾形、麻の葉亀甲、亀甲、菱	その他
	4	東照宮奥院鋳抜門		3.9	12.9	―	如意頭型	その他
10	1	東照宮神厩	戸(右)	8.8	21.7	―	出八双、牡丹、地紋花菱	金物
	2	東照宮神厩	妻戸(上)	10.2	23.7	厩、妻戸、上	入八双、牡丹	金物
	3	東照宮神厩	妻戸(下)	10.7	23.0	―	入八双、牡丹	金物
	4	東照宮神厩	戸(左)	8.9	21.5	―	出八双、牡丹、地紋花菱	金物
	5	東照宮神厩	戸(左)	9.0	22.0	―	出八双、牡丹、地紋花菱	金物
11	1	東照宮神楽殿		9.7	13.9	―	六葉葵	金物
	2	東照宮神楽殿		13.5	14.9	―	六葉葵	金物
12	1	東照宮五重塔	窓	9.2	31.4	―	出八双、唐草(宝相華)	金物
	2	東照宮五重塔	須弥壇	6.1	40.5	五重塔須弥壇	出八双、唐草(宝相華)	金物
	3	東照宮五重塔	仝	7.1	38.0	五重塔須弥壇	出八双、唐草(宝相華)	金物
13	1	東照宮五重塔ノ窓		23.6	24.2	―	入八双、隅金物、唐草	金物
	2	東照宮五重塔ノ窓		23.8	24.2	―	入八双、隅金物、唐草	金物
	3	東照宮五重塔ノ窓		24.5	23.4	―	入八双、隅金物、唐草	金物
	4	東照宮五重塔ノ窓		24.2	24.4	―	入八双、隅金物、唐草	金物
14	1	東照宮五重塔前面入口柱		31.9	15.3	五重塔入口柱	方立(下)金物、出八双、唐草	金物
15	1	東照宮五重塔前面入口柱		40.6	15.4	五重塔入口柱	方立(上)金物、出八双、唐草	金物
	2	東照宮五重塔前面入口柱		51.1	14.2	五重塔入口柱	方立(中)金物、出八双、唐草	金物
16	1	東照宮奥院鋳抜門(二枚之内)		10.2	39.8	2	唐草	その他
	2	東照宮奥院鋳抜門(二枚之内)		8.8	32.5	3	唐草	その他
17	1	東照宮奥院鋳抜門(二枚之内)		26.3	36.8	東、鋳抜門１	唐草	その他
18	1	東照宮奥院鋳抜門		39.5	9.0	東ノ鋳抜門、	唐草	その他
19	1	東照宮本殿之柱		40.0	28.8	東ノ本殿柱	地紋屈輪	彫刻
20	1	東照宮陽明門		14.2	15.1	―	出八双の先、八角と四角	金物
	2	東照宮陽明門		15.2	12.8	―	出八双の本、八角と四角	金物
	3	東照宮陽明門		17.0	10.0	―	花菱、唐草	金物
	4	東照宮陽明門		17.8	10.0	―	花菱、唐草	金物
	5	東照宮陽明門		5.9	6.0	―	格子金物	金物
21	1	東照宮陽明門	柱	39.8	28.0	陽明門柱	地紋屈輪	彫刻
22	1	東照宮坂下門	腰貫	16.7	33.3	―	網目	彫刻
23	1	東照宮奥院鋳抜門		3.3	19.7	―	八方麻の葉	その他
	2	東照宮奥院鋳抜門		3.3	20.2	―	八方麻の葉	その他
	3	東照宮奥院鋳抜門		16.6	4.7	―	三葉葵、唐草	その他
	4	東照宮奥院鋳抜門		17.5	6.8	―	八角と四角	その他
	5	東照宮奥院鋳抜門		23.3	35.8	東ノ鋳抜門	屈輪と四葉葵七宝繋	その他
24	1	東照宮朝鮮献備釣鐘(段中)		21.0	16.5	(文字の一部)	朝鮮鐘	その他
	2	東照宮朝鮮献備釣鐘(段中)	△丙	20.7	15.7	―	朝鮮鐘	その他
	3	東照宮朝鮮献備釣鐘(段中)		20.8	15.5	―	朝鮮鐘	その他
	4	東照宮朝鮮献備釣鐘(段中)	△丁	20.9	16.2	―	朝鮮鐘	その他
25	1	東照宮朝鮮献備釣鐘(段中)		22.0	16.3	―	朝鮮鐘	その他
	2	東照宮朝鮮献備釣鐘(段中)	△甲	21.5	15.3	―	朝鮮鐘	その他
	3	東照宮朝鮮献備釣鐘(段中)		22.7	16.1	―	朝鮮鐘	その他
	4	東照宮朝鮮献備釣鐘(段中)	△乙	21.3	16.2	―	朝鮮鐘	その他
26	1	東照宮朝鮮献備釣鐘	下段之右	20.5	33.4	釣鐘下右	朝鮮鐘	その他
	2	東照宮朝鮮献備釣鐘	下段之左	20.7	30.8	釣鐘下左か	朝鮮鐘	その他
27	1	東照宮朝鮮献備釣鐘	上段	18.2	8.0	―	朝鮮鐘	その他
	2	東照宮朝鮮献備釣鐘		19.2	8.5	―	朝鮮鐘	その他
	3	東照宮朝鮮献備釣鐘		19.1	8.1	―	朝鮮鐘	その他
	4	東照宮朝鮮献備釣鐘	下段之中央	15.1	23.3	釣鐘下中央	朝鮮鐘	その他
28	1	日光東照宮本殿(徳川百十一)	柱上部	25.2	34.7	柱上	蔵書印、金欄巻、菱	金物
	2	日光東照宮本殿(徳川百十一)	方立	34.6	10.2	方立、(メモ)	蔵書印、出八双、菱、地紋蜻蛉	彫刻・金物
	3	日光東照宮本殿(徳川百十一)		34.7	17.4	(メモ)	蔵書印、出八双、菱、地紋蜻蛉	彫刻・金物
29	1	日光東照宮拜殿石の間々曲輪巻柱金具(徳川八十四)		66.0	32.0	(メモ)	金欄巻、宝相華、牡丹、三葉葵	彫刻・金物

第百二十四号、明治三十年（一八九七）四月二十五日）である。建築学会での講演記録であり、日光東照宮の歴史や配置などの概要に触れた上で、日光東照宮に見られる意匠、特に装飾を中心として、配色、彩色、彫刻、曲線の多用、新機軸の意匠などを指摘したものである。これは近代日本の建築学界において、本格的に日光東照宮を扱った最初の論説である。[4] その後、塚本靖と大澤三之助の共著である「日光廟建築論」『東京帝国大学紀要』（工科第一冊第二号・明治三十六年五月）が発表され、[5] こうした著作の過程で、日光東照宮拓本は利用されたものと考えられる。拓本は意匠を研究する上で、写真が高価であった明治時代において、最も簡便に資料を入手する方法として用いられていたと推測される。

國學院大學の所蔵する日光東照宮拓本は、所蔵者であった塚本靖がどこに注目したかを示すものであり、それは、西洋の建築史観がもたらされた日本の初期の建築意匠学における日本の建築の位置づけを示すものである。逆にとらえれば、建築史学ではなく、建築意匠学において研究の対象とされたという、明治時代の日光東照宮の評価を表しているものとも言えよう。

明治時代は日本建築史学研究の草創期であり、飛鳥時代・奈良時代など古代建築の研究がようやく始まった時期である。[6] 日光東照宮が建築史学ではなく、建築意匠学において最初に注目されたのは、当時の建築史学の研究者にとって、解明すべき研究対象は古代建築であり、江戸時代の建築物である日光東照宮はさほど注目されていなかったことに理由があると考えられる。実際、日光東照宮拓本は、金物の拓本が半数以上を占めており、その点から判断しても、建築意匠学の観点が強く見られ、日光東照宮において施された文様などの意匠を把握するために作製されたものであると考えられる。日本建築の意匠という点では、時代が降るほど豊富になる。また、金物には細かな細工が可能であり、意匠を詰め込むことができるので、建築意匠学の対象として、日光東照宮の金物は有益であったと考えられる。

また、塚本靖が関わった明治四十三年（一九一〇）の日英博覧会には、古代建築である法隆寺や東大寺の模型とともに、日光東照宮陽明門の模型も展示されており、塚本靖旧蔵のこの日光東照宮拓本との関係も指摘できる。

その後、大正四年（一九一五）九月に『建築雑誌』の巻頭図に「日光東照宮幣殿内陣内々陣を開扉して御宮殿を望む」と題した写真が掲載されている。解説は、のちに連続して「日光廟造営精算書」を『建築雑誌』に連続で投稿する大江新太郎が書いており、建築学における日光東照宮研究の活発化が見られる。

日光東照宮の胡粉塗と風食

徳川家康は、没後一年で久能山から江戸の守り神として日光に改葬された。元和三年（一六一七）の徳川秀忠創建の日光東照宮は、現在のものではなく、銅瓦葺ではなく檜皮葺であり、また胡粉塗ではなかったとされている。現在の社殿は、没後二十年を意識し、徳川家光により寛永十三年（一六三六）に造営されたものである。

明治時代の部材の状況を写し取った資料である日光東照宮拓本を見ると、拓本1—1、拓本2—1、拓本2—2、拓本21—1など陽明門の柱を中心として外気に曝されている部材に、この時すでに風食が確認できる。社会の体制が変わった明治維新以降に生じた風食とすると、風食の程度が合わない。よって、これら拓本で確認される風食は江戸時代に生じたものと判断される。

胡粉塗などの塗りがある場合には、部材自体は塗り材により保護されて風食しないので、江戸時代のある時期に、塗りが存在しなかったことがあるということになる。日光東照宮は、江戸幕府の祖、徳川家康を祀る神社であるので、江戸時代において幾度となく修理が行われた記録があり、厳重に維持管理がなされていた建築といえる。したがって、塗りが剥がれた状態で何十年間も放置されたとは考えにくい。

しかしながら、風食は確認できるので、塗りが存在せずに、維持管理もな

されている状態、つまり、素木の状態で完成形であった時期があるということになる。実際、素木の状態が考えられる時期は、現状が胡粉塗であることからすると、徳川家光により再建された最初期ということになる。

柱などの部材は欅材で、胡粉塗を砂摺りの上に施したといわれているが、欅材は素木とするのが一般的であり、唐門の唐木の象嵌と併せて適さない。また、拝殿の将軍着座の間・法親王着座の間に面した柱は外側と異なり、金箔貼りになっている。

陽明門の側壁の牡丹の浮彫の下の胡粉塗の幕板からは、描かれていた花鳥図が発見されている。[7]また、徳川家康と徳川秀忠を祀る寛永十八年（一六四一）の金剛峯寺徳川家霊台は素木である。よって、日光東照宮拓本を一つの資料的根拠として、元禄期の修理の時に、風食した柱などの彫刻を保護するために胡粉を塗った可能性が指摘できる。

結

國學院大學が所蔵する日光東照宮拓本の考察により、明治時代の日光東照宮の評価、および、徳川家光造替の社殿が胡粉塗ではなく、素木造であった可能性があることが解明できた。

日光東照宮拓本は、第一に、建築の研究史として、調査方法を含めて明治時代の建築学界における日光東照宮の評価と研究状況を示す実地資料として評することができる。第二に、日光東照宮の社殿の変遷を考える上では、明治時代の時点で、風食が写し取られていることなどが分かる資料として重要である。また、写真があまり残されていない明治時代の日光東照宮の社殿の状況を知る手がかりとなる資料でもあり、國學院大學に所蔵される日光東照宮拓本は日本建築史上、有益な資料と言える。

なお当資料には、大猷院霊廟・円覚寺舎利殿の拓本、日本建築・西洋建築のスケッチ、工部大学校の講義課題なども含まれている。当時の建築学界を知る上で貴重な資料であるといえるが、紙幅の関係で稿を改めることとする。

註

（1）台紙28および29。
（2）拓本3―2（図3の左側拓本の下部）など。
（3）一点の拓本で彫刻と金物の両方が写されているものがあるため、合計数と拓本の点数は合わない。
（4）『建築雑誌』（第四十八号・明治二十三年（一八九〇）十二月二十八日）には、日光東照宮の配置図が掲載されているが、解説等は付随していない。
（5）伊東忠太の学位請求論文「法隆寺建築論」（『東京帝国大学紀要』工科第一冊第一号・明治三十一年（一八九八）三月）の次の号として発行された学位請求論文である。
（6）日本建築史学の初期の論文は、伊東忠太の「法隆寺建築論」（『建築雑誌』第八十三号、明治二十六年（一八九三）九月）の発表に始まり、註（3）の「法隆寺建築論」に繋がる。
（7）『国宝東照宮陽明門・同左右袖塀修理工事報告書』日光社寺文化財保存会 昭和四十九年（一九七四）

写真５　日光東照宮神厩

写真１　日光東照宮陽明門彫刻

写真６　日光東照宮神楽殿

写真２　日光東照宮陽明門

写真７　日光東照宮五重塔

写真３　日光東照宮拝殿

写真８　日光東照宮坂下門

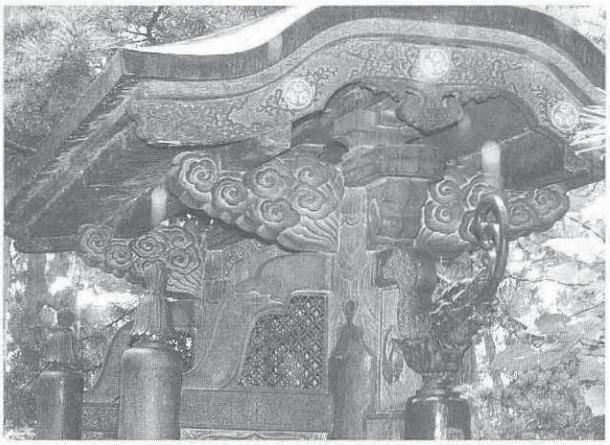

写真４　日光東照宮奥院鋳抜門

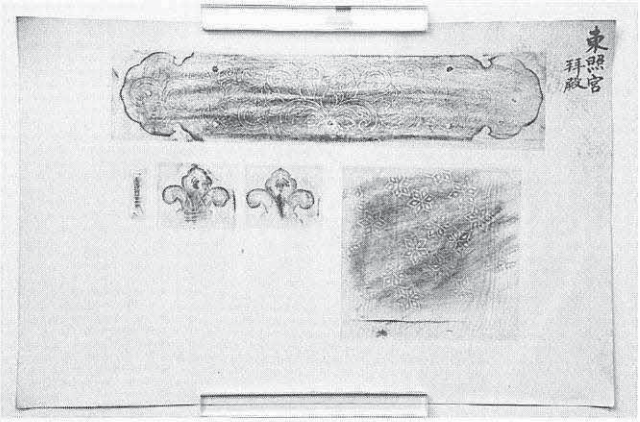

図５　東照宮拜殿（台紙５）

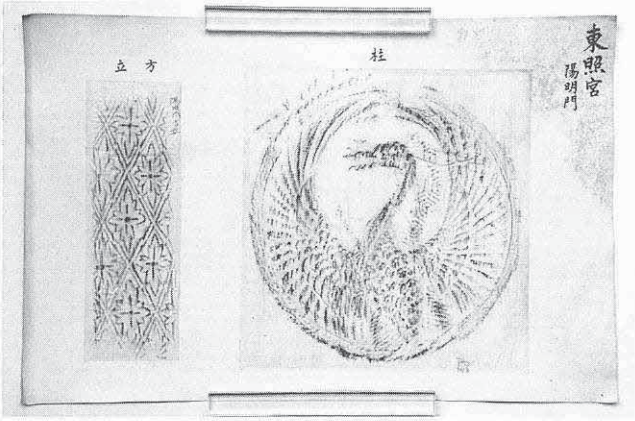

図１　東照宮陽明門（台紙１）

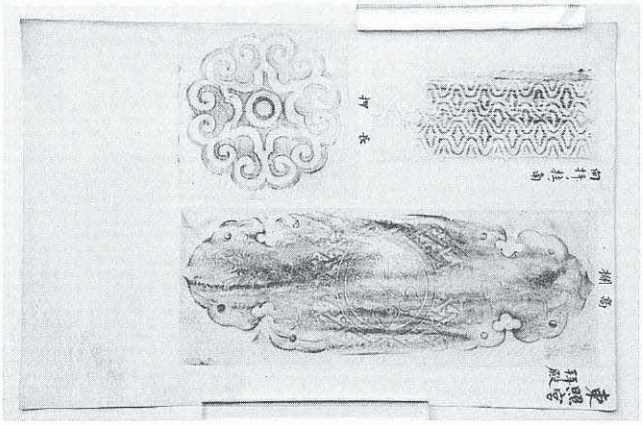

図６　東照宮拜殿（台紙６）

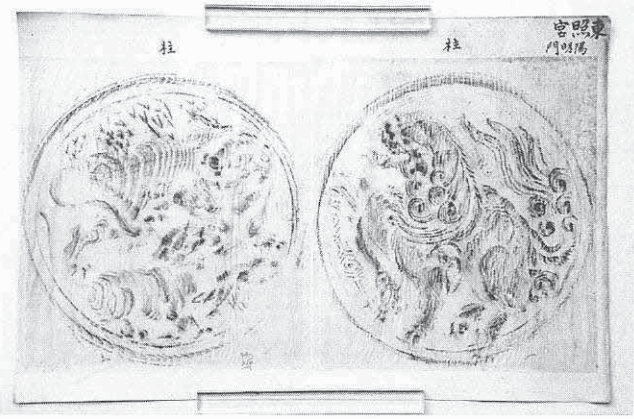

図２　東照宮陽明門（台紙２）

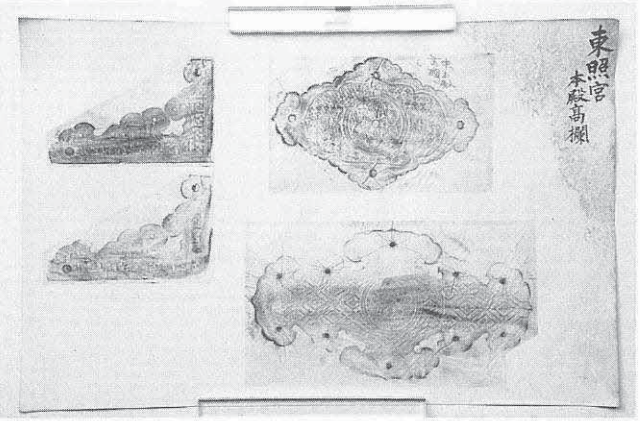

図７　東照宮本殿高欄（台紙７）

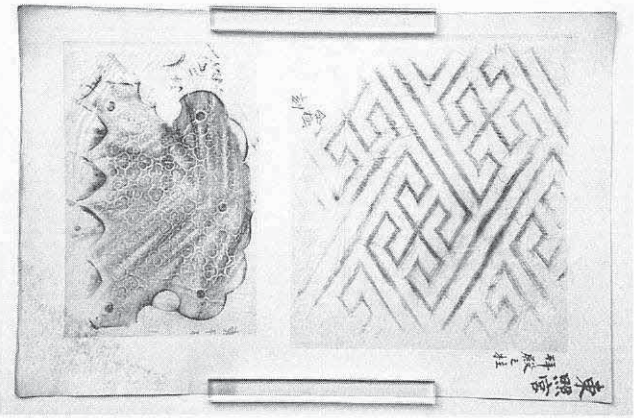

図３　東照宮拜殿之柱（台紙３）

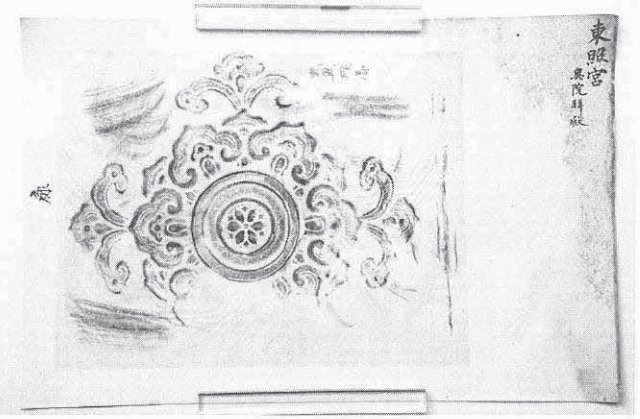

図８　東照宮奥院拜殿（台紙８）

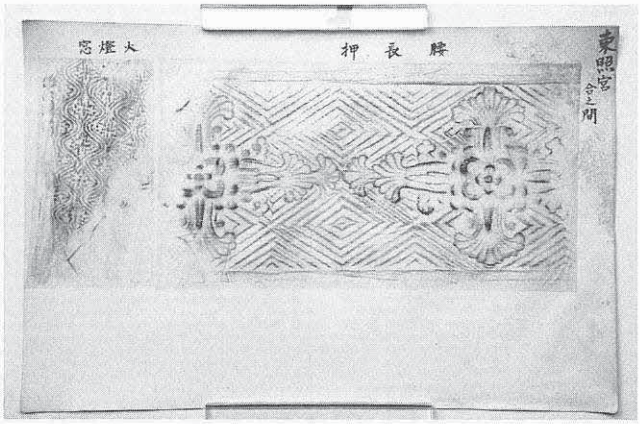

図４　東照宮合之間（台紙４）

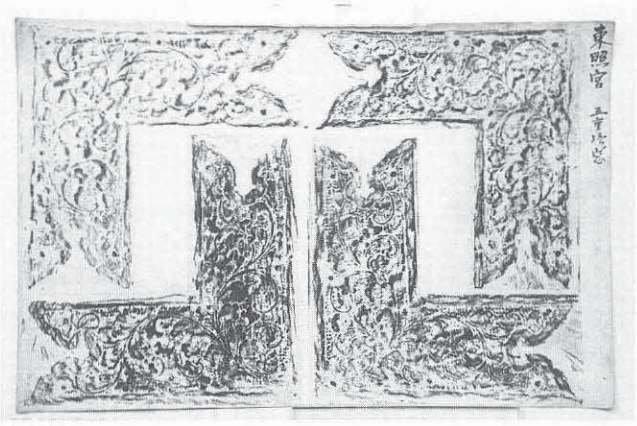

図13　東照宮五重塔ノ窓（台紙13）

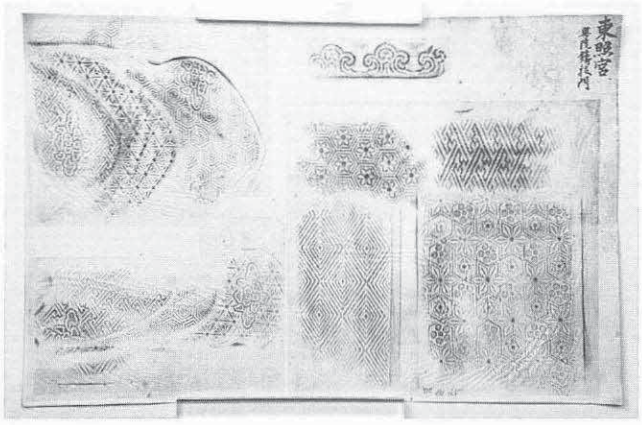

図９　東照宮奥院鋳抜門（台紙９）

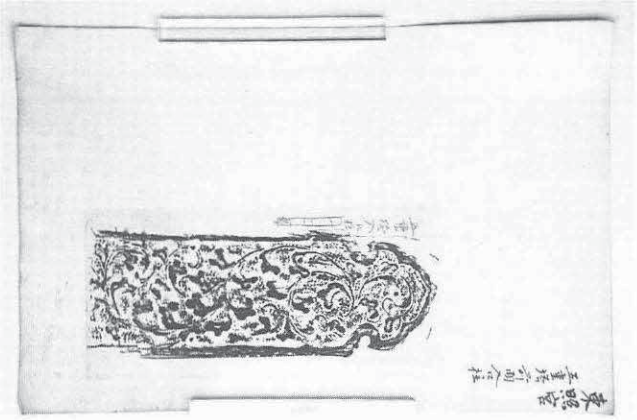

図14　東照宮五重塔前面入口柱（台紙14）

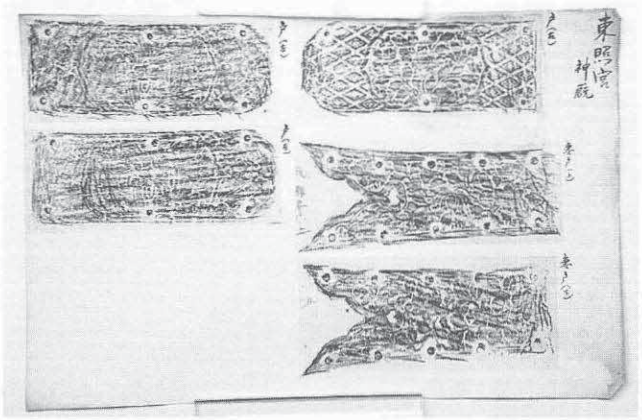

図10　東照宮神厩（台紙10）

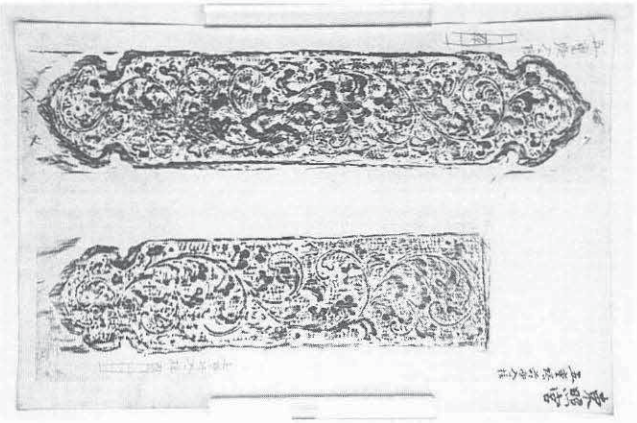

図15　東照宮五重塔前面入口柱（台紙15）

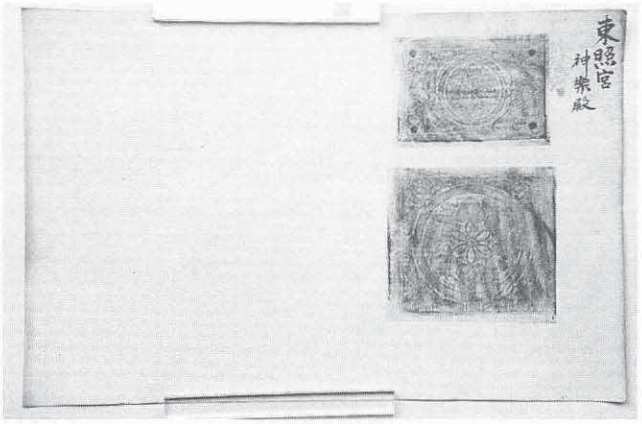

図11　東照宮神楽殿（台紙11）

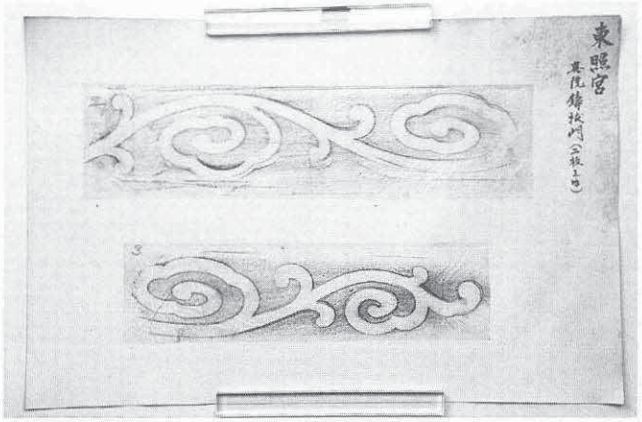

図16　東照宮奥院鋳抜門（二枚之内）（台紙16）

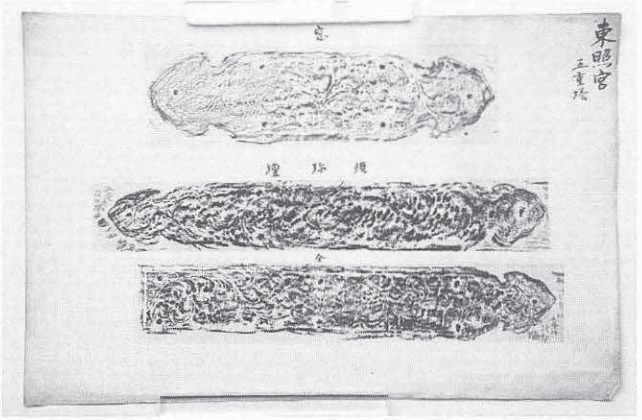

図12　東照宮五重塔（台紙12）

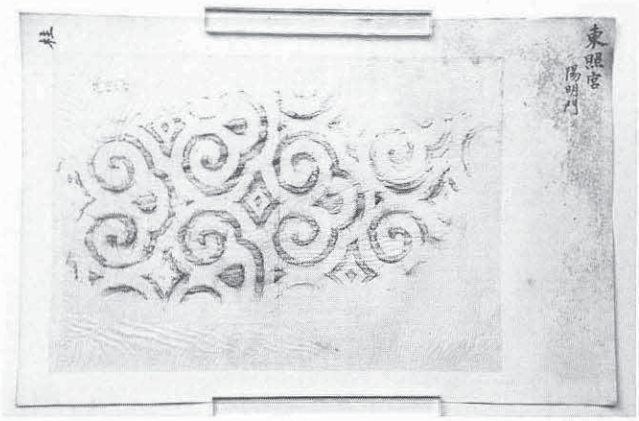

図21　東照宮陽明門（台紙21）

図17　東照宮奥院鋳抜門（二枚之内）（台紙17）

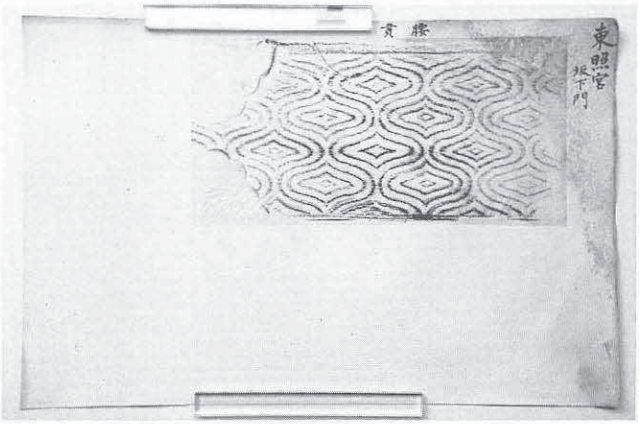

図22　東照宮坂下門（台紙22）

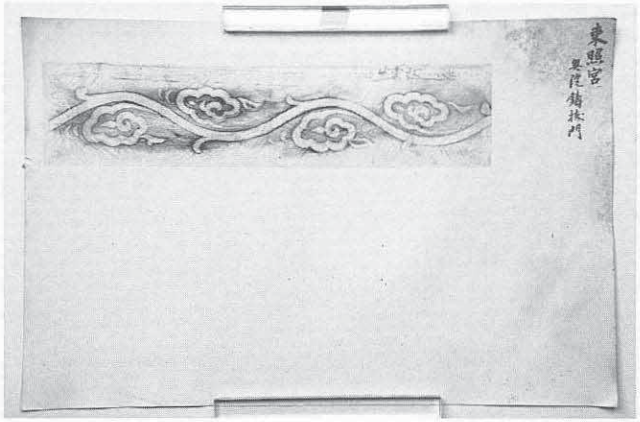

図18　東照宮奥院鋳抜門（台紙18）

図23　東照宮奥院鋳抜門（台紙23）

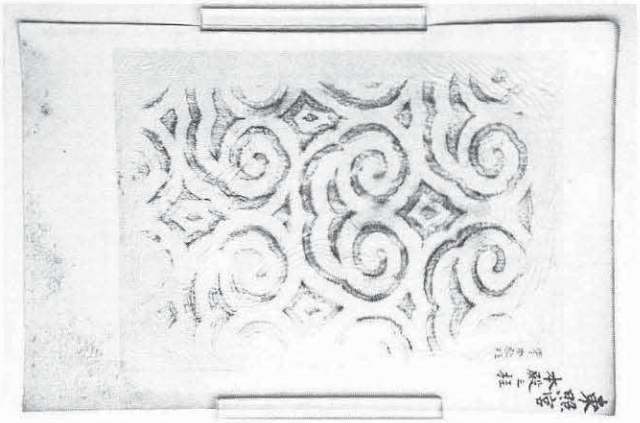

図19　東照宮本殿之柱（台紙19）

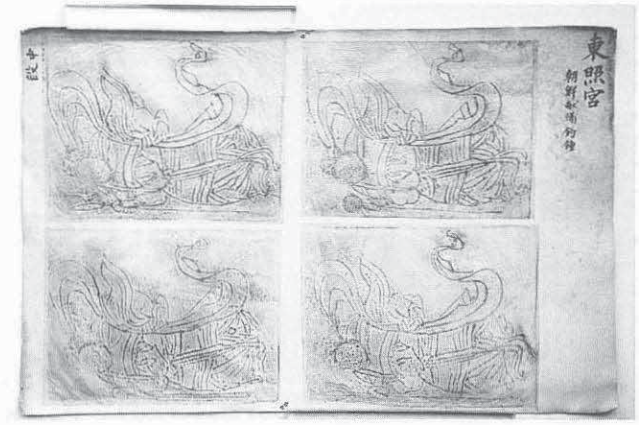

図24　東照宮朝鮮献備釣鐘（台紙24）

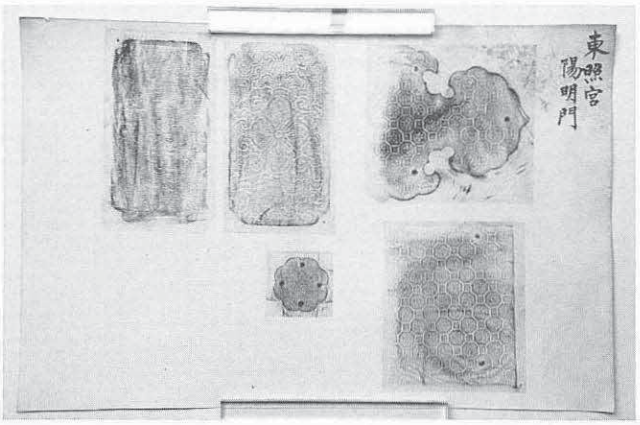

図20　東照宮陽明門（台紙20）

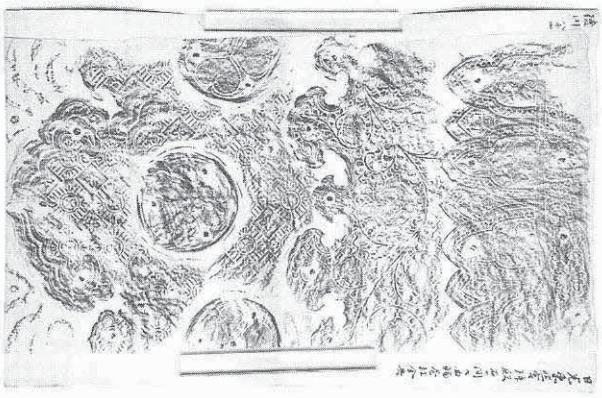

図29　日光東照宮拝殿石の間々曲輪巻柱金具（台紙29）

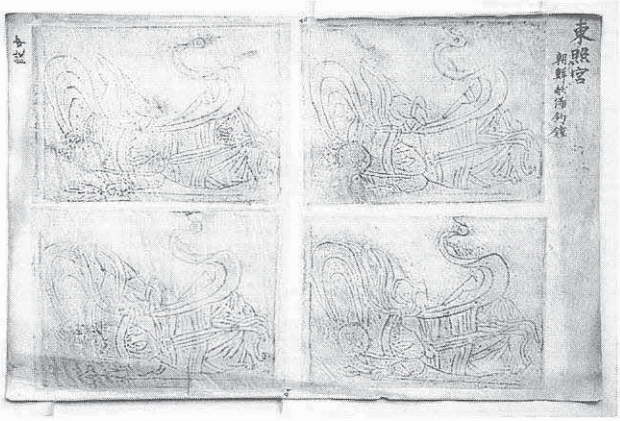

図25　東照宮朝鮮献備釣鐘（台紙25）

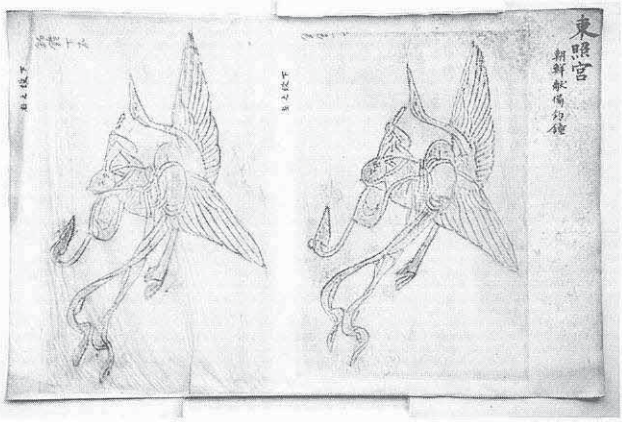

図26　東照宮朝鮮献備釣鐘（台紙26）

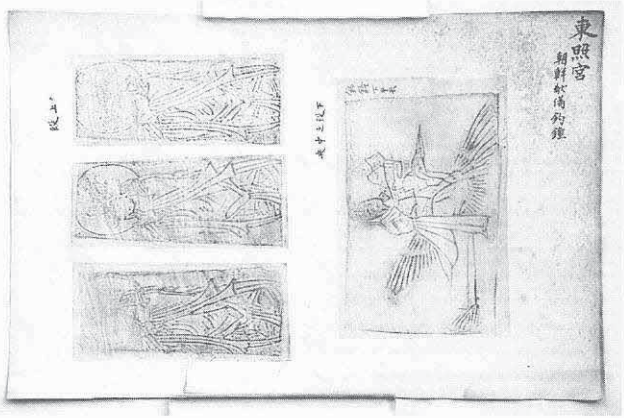

図27　東照宮朝鮮献備釣鐘（台紙27）

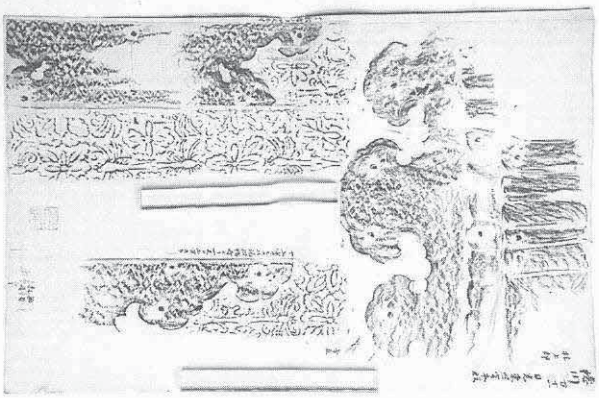

図28　日光東照宮本殿（台紙28）